

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 3 LESSON 1 授業例②

K.Y. 先生

指導計画表

(全5時間)

時間	学習内容・主な活動
1	<ul style="list-style-type: none">■GET・基本文の確認・Drill・Word Corner をベースにした班活動・語句と表現の導入・本文の音読練習・内容理解・Practice : Write
2	<ul style="list-style-type: none">■GET・本文の復習・Practice :・Listen での復習・Speak での対話練習■USE Read・語句と表現の導入・本文の音読練習・内容理解
3	<ul style="list-style-type: none">■USE Read・本文の確認・プリントでの復習■Lesson1 のまとめ■USE Speak・スピーチの指導と準備
4	<ul style="list-style-type: none">■USE Speak・スピーチコンテスト■単元テスト

※3 時間目と 4 時間目の間は、何日か時間が空きます

実践例

1. はじめに —Book3 の Lesson1 とは

Book 3 の LESSON 1 は Book 2 の LESSON 1 と同じように鑑のページはなく、GET もわずか 2 ページしかない。年度当初には授業担当者が変わる学校もあり、最初のうちは授業の中で授業の進め方やノートの取り方等を丁寧に指導される方もいるのではないかと思う。そのようなことを考慮しても、このページ数であれば時間的に余裕を持って授業を進めることができるはずである。また、文法項目は前年度に学習した受動態を扱っているため、新年度の英語学習への円滑な移行を図ることも容易なことと思われる。

そして Book 3 は中学校の最終学年、また義務教育 9 年間の最後に使われる英語の教科書である。小学校の外国語活動からスタートした英語学習も、ここで 1 つの節目を迎えることとなる。今までに学習してきた内容をふりかえることも大切だが、それとともに今後も英語を学び使っていこうとする態度を育成していくことも必要である。この LESSON 1 ではそのような点を踏まえ、英語を使う機会を増やすとともに、英語を使って何かを表現したり意思疎通を図ったりする中で達成感や喜びを味わわせることができるような配慮も必要だと思われる。

2. LESSON 1 の指導にあたって

(1) GET の授業展開

本文を扱う前に、文法の導入として Drill を行っている。Drill は今回改訂された教科書から登場したものであり、「聞く」「言う(話す)」「書く」「読む」という 4 技能を活かした活動を展開することができる。活動を通じて受動態に慣れ親しむことができる上、春休みの間に英語から離れていたであろう脳に刺激を与えることもできる。また、生徒がノートに練習した英文を活用しながら文法事項の構造や意味を確認することができるため、板書の時間軽減にもつなげることができる(この板書説明を進める中で文法事項の定着が図れていないと感じた場合には、前年度の授業で使ったプリントを提示する

などして、本時の学習内容との関連性を明らかにし、理解を促す)。

その後は p.7 の Word Corner へと進む。ここでは同じページにある Practice に関わる単語が登場することが多いのだが、次時の導入として Practice を扱うため、その部分を飛ばして、まず Word Corner を扱う。LESSON 1 では不規則変化の動詞がテーマとなっていることから、ここでは「原形—過去分詞」「過去形—過去分詞」というマッチングができるよう神経衰弱を班で行う(活動の間延びを防ぐため、単語数と時間はある程度で制限している)。

教材作りをする際、どうしても時間のかかることが気になるため、このようなカードを使った活動は敬遠されてしまいがちである。しかし、パソコンと市販の名刺用紙を使うことで、容易に作成はできる。その上、カードの大きさも統一でき、フォントの色を変えることで視覚的に「原形」「過去形」「過去分詞」の違いを明示化することもできるため、学習効果も高めることができる(ちなみにこの手法は、形容詞や副詞の活用に関わる「原級—比較級—最上級」のところで活用ができる)。なお、ここで扱った単語は一覧表にまとめてプリントで配布し、掲載されている過去分詞をつかった受動態の文を作ってくることを宿題にする。英語を苦手とする生徒には、同じページにある Speak や Write に書かれている英文を例文として提示することで、家庭学習の支援を行っている。各自が作った英文は、次時の最初にペアもしくは班で発表し合う。この活動をスピーチの初歩的段階と位置づけ、今後 LESSON 1 の最後に行うスピーチへとつなげていく(Listen は Speak の前後いずれかに行う)。

Word Corner の後には p.6 の本文に移る。現任校では各普通教室に大型モニター、書画カメラ、PC が配備されているため、基本的にはデジタルテキストを使って授業を進めている。そのため、生徒たちは本文や新出単語の音読練習を行う際には、教科書を開かずにモニターを見て練習する。必然的に顔が上がるため生徒の口の形が確認でき、また発音もよ

く聞こえるようになった。さらに「新出単語」「文など」というかたちで英文をマスキングすることもできることから、段階的に暗唱へとつなげていくこともできる。そして、ピクチャーカードやフラッシュカードもモニターで提示することができる。デジタル化により、特にフラッシュカードを使った単語練習での負担は大幅に軽減された。また何度も反復練習することも可能になり、生徒が英語を使う機会も大幅に増加したと感じている。

単語練習の後に本文の音読練習を行う（音読の指導法については安木（2011）に多くの手法が掲載されているので参考にした）。全体で何度かの練習を行った後、上記文献で「1人ずつ読み」と名付けられたペアでの音読活動を取り入れる。ここでは、発音や抑揚などの指導を行うが、それとともに音読する生徒に向けて相づちやレスポンスを示すことを聞き手に要求する。LESSON 1 では特筆すべき対話活動を行っていないため、このような指導を行うことで、単なる音読練習ではなく対話的な要素も含んだ活動へと発展させているのである。

なお GET の本文訳は、各 LESSON の終盤に行う「ふりかえり」で用いるプリントにおいて、穴埋め式の問題として提示し、答え合わせを行う中で確認する。空欄は主に新出単語のところに作るが、文法項目と重複したときには、日本語文を予め示しておく、英文1文をまるまる書かせたりすることもある。

授業の最後には次時の予告を行い、予習として単語の意味調べをさせている。単語の意味調べをさせることには賛否両論あるようだが、生徒たちは日頃辞書に親しむ機会が少ないため、意味調べを通じて辞書を活用する時間を持つてほしいため、意味調べをさせている。時折、意味の確認を行ったときに、「辞書には〇〇という意味もあったけど、●●という意味もあった」という意見が聞かれることもある。辞書を引くことで生徒の力は伸び、知識が増えていることを感じる瞬間である。

（2）USE Read の授業展開

改訂版教科書から新たに登場した LESSON 後半の Read。p.8 の写真脇に掲載されている単語数は107。これは Book 2 の LESSON 2 にある Read の A Calendar of the Earth (143 語) よりも少ないため、

生徒は比較的容易に読み解くことができるものと思われる。

LESSON 1 の Read では、Pete Gray という戦前に活躍した大リーガーの姿から“A winner never quits.”という名言の意味について考えることをねらいとしている。また、本文は久美のスピーチ原稿という設定になっており、次ページの Speak の活動にもつながっている。このようなことから、指導においては、次の2点を意識して取り組んでいる。

1 点目は英文を読めるようにすることである。今回の改訂で Read というページが新設された目的は多々あるだろうが、三省堂（2012）では「GET で身に付けた知識・技能を活用して、ある程度のまとまりをもった文を読む力を育成する」と明記されている。そのことから、Read では GET での学習を活かしつつ、内容の把握を図っていくことが必要である。その中で英文のポイントを明確にするためには、教科書に掲載されている In-Reading や Check、そして Post-Reading といった Q&A を活用するのも有効な手立てである。また上記引用文の「読む」には「読んで理解する」だけでなく「声に出して読める」という意味にも理解できることから、GET と同じようにデジタルテキストを活用した新出単語や本文の音読練習にも取り組む。このような取り組みを通じて、「Pete Gray の人物像」「久美が彼自身や彼の言葉から学んだこと」、そして「2人に通じる思い」などといった点を中心として、本文の内容をしっかりと理解させる。

2 点目は久美の原稿をもとに、生徒が自分の考えをスピーチする活動へと円滑につなげることである。授業での音読練習と Q&A による内容理解が済んだ時点で、本文訳がわかるようなプリントを作成・配布している（全文を掲載しているわけではなく、GET のときのように一部空欄にしている）。本文訳からスピーチ全体の内容を把握し、久美の思いに共感できる生徒も出てくる。そのような生徒は、強弱や緩急をつけて本文を読むなど、まるで自分のスピーチをしているかのごとく音読を行う。そして当然のことながら、LESSON 1 の最後に取り組むスピーチにおいても、原稿作成の段階から英文のいたるところに工夫が凝らされ、実際のスピーチでは聞

き手の興味関心を呼ぶような実践を示してくれている。

(3) USE Speak の授業展開

ここでは「好きな言葉」というテーマについて、自分の思いや体験を英文にまとめ、口頭で伝えることを目標としている。p.9にあるモデル文も39語と少ない語数で英文を構成していることから、活動を通して短い文でも自分の思い等を自らの言葉で伝えることの大切さを理解させたい(スピーチ活動に関しては、ELEC(2009)に指導のポイント等が紹介されている)。

現任校では4月に修学旅行をはじめとした行事が多くあり、なかなか授業時間が確保できない。そのため、このスピーチは5月の連休明けの授業で行っている。この時間的余裕によって、「私には好きな言葉がない」とこぼし、スピーチに乗り気でない生徒でも自らの体験をふりかえりつつ、連休中に読書などに親しむ中で、様々な偉人の生き方に触れ、その中から理想とする生き方や印象的な言葉を見つけて出すことが可能になり、魅力あるスピーチ原稿を作ることへとつながっていくのである。

そのようなことから、p.9にあるDo your best.など言葉ではなく、巻末にあるWords to Rememberなど有名な人物との関わりのある言葉を例として示し、生徒にもそのような内容のスピーチを要求している。USE Readで学んだように、言葉の持つ力をより深く理解させるためには、その言葉を残した人物についても知る必要があると考えているからである。実際このような段階を経てスピーチをした生徒の中には、巻末にあるAnne Sullivanの言葉からヘレンケラーの存在を知り、その後、英語の手話にも興味関心を持ち独学で勉強を始めたものもいた。

そしてスピーチは班単位で実施している。これは、大勢の前で話をするのを拒もうとする生徒の負担を軽減するとともに、間近でスピーチを聞く友人の仕草や反応から、話し手自身が自分の思いが相手に伝わっていることを体感することで、英語を使って意思疎通ができたという喜びや達成感を味わわせたいからである。

また、今回は3年生になって初めてのスピーチである。今後生徒がさらにスピーチの技術を高めていけるよう、スピーチを行った後には各班で相互評価を行い、よかった点と改善すべき点を明らかにしておく。さらに、活動中に各班を見回っている中で、他の生徒の手本とすべきスピーチを行っていた生徒をピックアップし、クラス全員の前でも改めてスピーチを行わせることで、生徒たちにめざすべき姿を明示している。

また、スピーチを行う上で重要なのが、聞き手の姿勢である。静かにスピーチを聴くということは当然のことであるが、そのほかにもp.9のTryを活かし、聞き手側にメモをとらせながらスピーチをさせることもある。しかし、メモをとることばかりに気がいってしまうと、アイコンタクトやジェスチャーなどの話し手の工夫への気づきがおろそかになってしまうため、指導の際にはメモをとるだけでなく、話し手の姿もよく観察することも指導している。

3. おわりに —Lesson1 がもたらすもの

LESSON 1は偉人の言葉に焦点を当てているため、年度初めに取り組む学級や個人の目標設定の場面でも活かすことができる。Readで扱われている“A winner never quits.”という言葉やPete Grayの姿に感動した生徒の発案で、この言葉を学級目標にしていたクラスも過去にはあった。英語は生徒が学習を進めていく中で、新たな知識や技能を身につけていくことをめざしているが、このように英語に親しむ態度を育成することもまた、力を高めていく上で重要な要素であると感じている。

冒頭でも述べたように、Book 3のLESSON 1はこれまでの学習のまとめの第一歩となるところである。短い單元ではあるが、様々な活動に取り組む中で生徒たちが「英語を使うのは楽しい」「英語を使って〇〇ができるようになった」といった思いを抱くことによって学習意欲が高まり、その後の知識技能の向上につながっていくのではないかと考えている。

最後に余談ではあるが、Book 3だけでなくBook 1, 2でもLESSON 1の指導ではペアやグループでの活動を積極的に活用している。日番や清掃など普

段の学校生活において班やペアという形は至る所で取り入れられている。LESSON 1 を扱う時期はクラス替えの直後であり、お互いに協力しながら活動を進める経験は、その後の学級運営においても大きな意味を持つはずである。学年を問わず年度初めの LESSON 1 では生徒同士が学び合う機会をたくさん提供し、人間関係の構築を図ることも必要だと思う。

それぞれの学校によって、学習環境や生徒の実態が異なるため、全ての学校においてここで紹介した実践ができるとは思わないが、このように実践を紹介し合うことで、日々の授業をふりかえり、生徒が生き生きと学ぶ姿の見られる授業が展開されることへとつながるものと考えている。

【参考文献】

- 安木真一（2011）『英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法 54』明治図書
- 三省堂（2012）『NEW CROWN ENGLISH SERIES 3 Teacher's Manual ①解説編』三省堂
- ELEC 同友会英語教育学会 実践研究部会（編著）（2009）『中学校・高校 英語 段階的スピーキング活動 42』三省堂